

国際シンポジウム 総括

平藤 喜久子

総括

平成二十九年一月二十一日に、國學院大學渋谷キャンパス百周年記念講堂を会場として国際シンポジウム「神話の詩学―舞・歌・型―」が開催された。

日本の神話は、古事記や日本書紀のなかに物語として残されているが、それは散文としてだけでなく、歌謡としても伝えられ、さらに舞われ、演じられてもきた。表現のしかたに違いがあっても受け継がれる型もあるだろう。そうした問題を論じるため、今回の国際シンポジウムは二部構成とした。

第一部は、「受け継がれる神話的世界―宮地嶽神社の「ツクシ舞」と巨石古墳―」をテーマとし、宮地嶽神社宮司の浄見讓氏が「ツクシ舞と阿曇磯良」と題する講演を行い、その上で「ツクシ神舞 浮神」、「ツクシ神舞 秋風の辞」、「八乙女舞 橘」の三曲が実演された。

個人的なこととなるが、平成二十八年の三月、九州の装飾古墳をめぐる旅をしていた。そのなかで、装飾古墳ではないが古墳のある神社があると聞き、出かけてみることにした。それが宮地嶽神社であった。浄見宮司の講演にもあるように、きわめて大きな横穴式石室であり、そこで不動尊が祀られ、現在も祭祀が行われている。古墳と祭祀が融合され、それが現在にも生きていることを知り、大変興味深く思い、社務所の方にいろいろと質問をしていたところ、

浄見宮司とお会いできることとなった。その席上、「ツクシ舞」のことも知り、神話がさまざまな姿で神社を舞台として受け継がれていることを、ぜひ多くの方にも紹介したいと感じた。その出会いが、今回のシンポジウムでの講演、そして「ツクシ舞」の実演という形で実を結んだのである。きわめて貴重な機会となったことを、この場を借りてあらためて感謝申し上げたい。

第二部は、「神話の詩学」をテーマとして、まず渡邊卓氏（研究開発推進機構助教）が「記紀歌謡の世界―文献に収載されることをめぐって―」と題する講演を行った。記紀歌謡について、その歌謡を独立したものとみるか、物語のなかで解釈していくか、一つ一つの歌謡ごとに議論があるわけだが、それを古事記、日本書紀のなかの特定の文脈に置かれた、という点を重視し、伝承という観点から論じるというものであった。歌と物語、その融合のなかに、伝承の姿を見ていこうとするものである。

アラン・ロシエ氏（フランス高等実習院教授）は、今回のシンポジウム全体のテーマである「神話の詩学」の発案者であり、同タイトルで講演を頂いた。フランスは近代以降神話学の盛んな国であり、ロシエ先生はそのなかで日本神話を主たる対象とする神話学者として活躍してこられた。代表的な著作に *Mythe et souveraineté au Japon*（『日本における神話と主権』）などがあるが、残念ながら日本語に翻訳されたものはなく、なかなかこれまで研究が紹介される機会が少なかった。今回講演をお引き受けいただき、最新の研究成果を直接聞かせて頂けたことは、神話学を学ぶ者としては大変な喜びであった。

ロシエ先生は、神話学の歴史を振り返りながら、とくに二〇世紀を代表する神話学者レヴィ・ストロースの研究を再検討した。レヴィ・ストロースといえば、構造主義という言葉がセットとなって出てくるだろう。彼の研究は、南

米先住民の神話にも古代ギリシャの神話と比較できる構造があり、「論理」があることを近代的知性のもとに明らかにしようとしたものである。ロシエ先生は、そうした枠組みで生きた神話を捉えることこそ、批判的に考えるべきであるとする。そのことは古事記の歌と物語との関係を考えることでより明らかになる。つまり、そもそもが断片的に、重要なものを強調して描くスタイルで伝えられ、そして後に縫い合わされたと考えられるからである。古事記の歌と物語の関係、それがどう全体としてつなぎ合わされたのか、その研究が、神話学の視点そのものへの再検討を促しているということだろう。

これらの充実した講演を踏まえ、総合討議では、「ツクシ舞」の海外公演での反応についてや、日本と海外の比較についてなどが取り上げられた。とくに後者については、歌われ、演じられた神話、歌謡と神話という点で、ギリシャ悲劇との比較について話題となった。

また、舞楽で使われる楽器についても古代の楽器と現代の楽器の違いのことなど、登壇者同士での活発な討議が行われた。

神話の多様な伝承形態について、今回のシンポジウムはその一端を論じたに過ぎない。今後さまざまな観点からの研究が進められることを願っている。